



さぬき市の文化財

さぬき市文化財保護協会

さぬき市の文化財

さぬき市文化財保護協会





さいきょうじろくめんせきどう
6 西教寺六面石幢 2基

所在地 / さぬき市大川町富田東
 所有者(管理者) / 西教寺
 指定年月日 / 昭和51年(1976)6月29日

有形文化財 MAP 3・B-2

Saikyoji Rokumensekido

西教寺の山門の約100m手前の道端に六面の石幢が2基ある。当石幢は「讃岐国名勝図会」に紹介されており、当時から2基存在していたことや、かつて近くに西教寺の山門があったことを伝えている。

2基とも火山の凝灰岩製で、東側の石幢(手前)は、幢身高さ約140cm、幅約42cm、一面の幅約28cmで正六角柱である。1面に「永和二年歳次丙辰三月廿四日」と刻まれており、1376年に造立されたことがわかる。この右隣の面には「釈迦如来」の梵字が薬研彫されている。

西側の石幢は、笠から上が欠損している。幢身高さ約138cm、幅約60cmである。各面は幅が異なり不整六角形である。一面に「應安五年壬子年□月」の銘文があり、1372年の造立であることがわかる。年号の上には2行に「現世安穩」「後生菩提」とあり、造立の主旨が記されている。また、その上には「大日如来」を頂点に、右下に「不動明王」、左下に「釈迦如来」の三つの梵字が月輪の中に刻まれており、他の面にも一面につき二つずつ、塔全体で総計13の梵字が刻まれている。これらは死者の年忌を司る初七日から三十三回忌までの13の仏を意味し、逆修供養(自分の生存中に自分のために死後の法要を営むこと)のために作られたものである。こうした信仰を十三仏信仰と呼ぶ。十三仏信仰は、南北朝時代後期頃から民間信仰として流行し、室町時代になると各地で十三仏信仰に関わる石造物が見られるようになる。当石幢は、その初期資料として注目される。



新町自然石灯笼



石鉄大権現灯笼

しんまちしぜんせきとうろう いしづらだいごんげんとうろう
7 新町自然石灯笼 含石鉄大権現灯笼 2基

所在地 さぬき市志度 / 所有者(管理者) 元屋 / 指定年月日 平成5年(1993)2月18日

有形文化財 MAP 1・C-1

新町自然石灯笼 安山岩の自然石で作られた灯笼で、総高320cm、火袋は火口のない四方から円窓だけのものだが、その上に乗る笠は長い部分の直径が280cmという巨大なもので、飾りではなく簡素に豪快に作ってあって、一名お化け灯笼と呼ばれている。志度寺への遍路道である志度新町珠橋西側道路沿いにある。「安政四巳年六月吉日」(1857)元屋醤油初代小倉嘉平が石鎚信仰に燃えていた実弟、高松藩士田山助造の勧めによって、間川雲附山に祀ってある石鎚神社への奉獻と、醤油や塩を運搬する渡海船の道しるべを兼ねて、玉浦川河口に建立したものである。北側に高さ120cm、幅65cmの黒くて硬い自然石の道標があり、表面に「石鉄山道」その下に「是より二十丁」と刻まれている。またその台石には「小倉九平、田山賢太、小倉松三郎」の名がある。

石鉄大権現灯笼 高さ280cm、笠の幅の広いところで120cmと上記のものより小振りだが、自然石の見事なものである。軸部の表面には「雲間山石鉄大権現」、北面に「嘉永五壬子天八月吉祥日」(1852)と刻まれている。建立者の名は見えないが、志度江の口元屋醤油の東道路沿いにおいて、小倉家の建立である。